



「その言葉は、誰のため？」

受賞者：岡部 卓也 さん

配属されたばかりの小児病棟。白衣のポケットよりも胸の中に、緊張と不安をぎゅっと詰め込んでいた私は、毎日を失敗と反省の中で過ごしていた。そんな日々の中で出会った、一人の男の子。

彼は5歳。白血病の治療のため、長期入院していた。骨髄穿刺、髄液検査、何度も繰り返される採血。どれも彼にとっては恐怖そのものだった。処置のたび、かすれる声で「こわい、やめて！」と泣き叫ぶ彼に、私はただ必死で声をかけていた。

「すぐ終わるよ、大丈夫だからね」

何度も、何度も。自分自身に言い聞かせるように。

ある日、採血の準備をしていたときのこと。私はいつものように「大丈夫だよ」と声をかけた。すると彼は、涙をたたえた瞳で言った。

「大丈夫って、何が？」

その瞬間、言葉が喉の奥で凍りついた。「大丈夫」という言葉が、彼には分かってもらえない証しのように響いていたのだ。

たとえ5歳でも、彼は自分の身体の異変や恐怖

を、きちんと感じ取り、理解していた。私はその日之境に、彼との関わり方を見直した。

処置の前には「何をするのか」「なぜ必要か」「どのくらい痛むか」を、子どもにも伝わる言葉で丁寧に説明するようにした。そして、「どっちの手にする？」「この絵本を読んでからにしようか？」と、小さな「選べること」を意識して増やしていった。

自分で選び、乗り越えた体験は、彼にとって「安心」と「自信」につながっていったのだと思う。

退院の日、彼は私の手をぎゅっと握りしめて言った。

「もう、だいじょうぶだよね」

その笑顔は、今でも忘れられない。ようやく、あの言葉が彼にとって「本当に安心できる言葉」になったと感じた。私は彼から「言葉の重み」を教わったのだ。

看護とは、ただ処置をするだけの仕事ではない。目の前の人の感情に寄り添い、その「人生」に触れていく営みだ。治療の影にある小さな叫びや葛藤に気づき、向き合うこと―それこそが、看護の本質だと、彼が教えてくれた。